

新型コロナ対策で「和歌山方式」主導した医師…「5類」移行後も「感染予防の重要性変わらず」

8/5 読売新聞

和歌山県幹部として新型コロナウイルス対策を担い、独自の「和歌山方式」を主導した医師で東京医療保健大・学事顧問の野尻孝子さん（69）は、新型コロナの感染症法上の分類が季節性インフルエンザと同じ「5類」に引き下げられてから1年以上がたった今も頻繁に講演している。依頼が絶えず、野尻さんは「コロナ禍はある意味、災害だった。未知の感染症や災害などに備えるため、教訓を伝え続けたい」と話す。（竹内涼）

和歌山方式は、幅広い検査と全員入院で封じ込める戦略だ。2020年2月に発生した全国初の病院内クラスター（感染集団）をきっかけに生まれた。この時、病院職員や患者ら400人以上に検査を行い、約3週間で終息させた。国の当時の基準を上回る対処だった。

前知事の仁坂吉伸さん（73）とともに、県福祉保健部技監として当初の対応に当たった野尻さん。昨年3月末の退職後、30回以上講演を行い、当時の経験や心境を発信した。

聴衆は医療従事者だけでなく、地方議員、女性団体など幅広い。時には1日2回の講演をこなすこともあった。野尻さんは「危機管理の観点からも当時の舞台裏に注目が集まっているのでは」と分析する。

講演では、どのような医療やケアを受けて最期を迎えたいかを平時に家族や医師らと話し合う「アドバンス・ケア・プランニング（ACP）」の重要性も訴えている。コロナ禍での入院調整で、患者と家族の意思が異なったり、意思がわからなかったりする場面に遭遇したからだ。

また、コロナ禍当時の業務を巡る葛藤などを赤裸々につづった著書「“和歌山方式”を生んだ新型コロナとの連戦に思う」の売り上げも好調で、増刷も検討しているという。

新型コロナが5類に移行して1年以上が経過したが、野尻さんは「症状は人によって様々だ。感染予防が重要なことは変わらない」と指摘する。毎年のように、部屋を閉め切って冷房を使う夏には感染が拡大しており、注意が必要だという。

今後も積極的に講演をしていくという野尻さんは「情報発信や意思決定のプロセスなど多くの学びがあった。講演や著書で広く社会に還元したい」と話す。

マスク、手指消毒心がけて…感染者6週連続で増加

和歌山県は2日、県内の定点医療機関から直近1週間（7月22～28日）に報告された新型コロナウイルスの感染者が1医療機関あたり16・14人となったと発表した。前週より0・49人増え、6週連続で増加した。新規感染者は791人、基幹定点医療機関（11か所）の新規入院者は118人だった。

保健所管内別の報告数 (7月22～28日)	定点数	報告数	平均	前週平均	※平均は、定点医療機関1か所あたりの平均報告数
和歌山市	15	248	16.53	13.67	
海南	3	150	50	53.67	
岩出	6	88	14.67	9.17	
橋本	6	147	24.5	19.5	
湯浅	4	14	3.5	11	
御坊	3	20	6.67	12	
田辺	7	68	9.71	9.57	
新宮	3	44	14.67	27	
串本支所	2	12	6	0.5	

オミクロン株の新系統「KP・3」が主流となり、感染したことがある人もかかる恐れがある。お盆などに重症化リスクのある高齢者らと会う時には注意が必要だ。県健康推進課の担当者は「マスクの着用や手指消毒などの対策を心がけてほしい」と呼びかける。